

エジプト教員研修（第3 バッジ）受け入れの省察

メタデータ	言語: jpn 出版者: 公開日: 2021-05-11 キーワード (Ja): キーワード (En): 作成者: 淵本, 幸嗣 メールアドレス: 所属:
URL	http://hdl.handle.net/10098/00028704

エジプト教員研修(第3 バッジ)受け入れの省察

淵本 幸嗣

はじめに

福井大学連合教職大学院は、エジプトの教員研修を継続的に受け入れている。今回は3回目で、令和2年1月20日から2月14日までの期間、幼稚園の教諭、小学校の教諭を受け入れることになった。テーマとしては、授業研究の研修ということになっている。これまでは、管理職の受け入れが多く、授業研究での受け入れは初めてとなる。

本稿では、できるだけ研修の実態を丁寧に記述するとともに、課題と成果について、第1バッジ、第2バッジとの関連の中で長期的な視点も交えて省察していきたい。

第Iでは、福井大学附属幼稚園、福井大学義務教育学校、長野県伊那小学校、福井市内の公立小学校の授業参観、学校訪問に関する報告を中心に省察する。

第IIでは、大学におけるカンファレンス、講義等に関する報告を中心に省察する。

第IIIでは、残された課題を明らかにするとともに、今後の展望を拓く。

I エジプト教員の受け入れと学校訪問

1. 事前のスタッフ・ミーティングでの方針の確認

今回の研修を実施する前に、以下のことが事前のスタッフ・ミーティングの中で確認された。日本とエジプトの教育をめぐる状況の違いを勘案して、研修がスムーズに進行するためのアイデアが共有された。第一回目、第二回目の実践の省察を生かす重要なミーティングとなった。

- ・教育課程、カリキュラムという言い方だと、エジプトでは座学の教科指導という意味になるので注意する。
- ・エジプトで普及している日本型の特活は、学級活動と

学級指導のみで、話し合いのやり方ばかりに特化している。児童会活動や学校行事はない。

- ・総合、生活、道徳の違いについては混乱するので、「子どもの活動を大切にする授業」という説明で特活としての枠組みで大きく扱う。
- ・今回の研修においては、研修生に係活動をローテーションで体験してもらおう。ファシリテーター、タイムキーパー、白板記録、健康管理というものを予定している。特別活動に係活動が重要であるということを研修生自身に実感してもらおう。
- ・日本の特活の目標として重要なことは、次の3点であることを理解してもらおう。

- 1 協働
- 2 コミュニケーション
- 3 自主的・自律的な学び

- ・今回は、若い世代の授業研究のグループが来日する。ここでいう授業研究は、主に特活の授業研究である。
- ・授業研究では、研修生に子ども一人一人を見取ってもらう。この体験もしてもらうことで、教師しか見とらない授業研究のスタイルからの転換を図る。
- ・1時間単位の授業研究ではなく、授業を長期に追いかけるという視点を持たせる。
- ・長期的なレッスンスタディでは、記録が重要になる。質の良い記録を読むことの意義を理解してもらおう。
- ・子どもの記録も教師の記録も大切なメタ認知につながる。実践のリフレクションを記録にまとめ、帰国後の実践につなげる。
- ・実践、記録、省察というサイクルを継続することが教師の資質能力の向上につながることを伝える。

どの内容もエジプトの状況を踏まえたものであり、日

本からの一方的な押し付けにならないような配慮が見える。とはいうものの、私自身チャレンジしたいことがあった。それは、若い世代の授業研究グループが来日するのであれば、授業研究を特活の授業研究に限定するのではなく、教科教育等でも行うべきだということを伝えたい。レッスンスタディは、日本の教師教育の貴重な財産であり、長きに渡って蓄積されてきたものである。それは、世界に誇る日本の教育文化と言ってもよいもので、エジプトの研修生にも伝えていきたいと考えた。

2. 自己紹介で共有した各自の取り組みと問題意識

私は、A1グループを担当した。班員の5人は全て女性で、20代・30代の若い先生方であった。大学院修了の先生や大学院で学んでいる先生もいた。専門としては、フランス語、歴史学、地球科学、マスメディア論等の研究をしており、大変優秀な人々という印象を持った。

すでに校長や同僚の教員がこれまでの研修で日本を訪問しており、報告会等でそれらの情報を共有していたので、第1バッジの時のぎくしゃくした空気にはならなかった。出身は、カイロだけでなく、周辺の県やシナイ半島の紅海に面した地域の人も参加していた。自己紹介では、自分のこれまで取り組んできたことや課題を3つの種にポイントを絞って紹介し合った。目的は、お互いを知ろうということであり、初対面の緊張も、互いの実践を語り合い、聴き合う中で、自然と薄らいでいった。以下は、自己紹介の中で紹介された班員の声である。エジプトの状況や課題が見えてくる。

- ・先発のEJSと後発のEJSとの教育内容の差を指摘する保護者やマスコミがあり、困っている。エジプトでは、同じEJSなのだから同じ教育内容でないといけないという考え方が主流である。
- ・日本の研修では、各学校独自の実践が尊重され、評価されているが、エジプトではカイロの学校の取り組みがモデルとなっており、それと違っていることは攻撃の対象となる。統一したマニュアルやテキストがあるとありがたいのだが、何もなく困惑している。「EJSはこのようなことを行う学校である」というような基本方針等がない中で見切り発車している。
- ・EJSの統一したルールや教育課程や教育活動のテキストがあると教員間で共有できるし、保護者にも説明しやすいのでありがたいが、ないので困っている。

- ・第一バッジ、第二バッジの報告で、日本においては教育のコンテンツがそれぞれ違って、自由度の高い教育活動が行われているが、エジプトでは自由度や柔軟性に課題がある。
- ・保護者の中には、教育力が低い者もいて、生活習慣の乱れている子どもたちに手を焼いている。遅刻等のルーズさが目立つ。
- ・隣のEJSとも交流をして研修を始めるようになった。
- ・日本の研修に行った先生と行かない先生との間で、モチベーションに差が出てきている。

以上のようなことを聴いたうえで、私は、感想として次のようなことを述べた。

「日本の学校においては、教育活動の内容については、各学校に違いがあります。学校や教師に自由度や柔軟性が認められています。一見するとバラバラなことをやっているように思うかもしれませんが、その様な教育活動の根幹については、コンピテンシーを高めるという一点で、日本中全ての学校が共通理解をしています。国の学習指導要領に明記されているからです。そのことを押さえた上で、各地域、各学校は、それぞれの状況に応じて教育活動を行っています。このコンピテンシーを高める教育については、世界の目標であり、日本やエジプトの目標でもあります。エジプト2.0にも明記されていることです。」

コンテンツを教え込む教育からコンピテンシーレベルの教育への転換について話をしたが、皆、頷いて聴いてくれた。エジプトにおいては、国家体制として、上からの命令や指導で物事が決まってきた歴史があり、学校や教師のイメージもこのようなことを引きずっており、教師は子どもたちに対して、上から目線で命令、指導するという古いスタイルが根強く残っている。「早く答えを教えてほしい。」という受け身な思考が、教師の中にあるものだから、子どもたちも同じような学びのスタイルになる。

今回の研修では、主体的で自律的な学びは、子どもたちにとっても、教師にとっても重要であることを伝えたいと思う。

また、エジプトは人口爆発下の競争社会であり、小学校においても、子どもたちの協働は弱い。協働によるコミュニケーション力の大切さは、エジプトにとって大きなテーマであり、今回の研修を通じて、繰り返し、繰り返し伝えていきたい。そして、このことは子どもたちの学びだけでなく教師の学びとしても極めて重要である。未来を生

きる子どもたちのためには、教師自身がコンピテンシーの理念を共有していなければならない。

今回、私が担当する班には、「マスメディア論」、「地球や宇宙の科学」、「フランス語の教師」、「E J Sの学校の面接官」等の優秀教員が5人集まった。どのようなことを考えているのかと問うと、次のような反応が返ってきた。

「給食20分、清掃10分は、エジプトでも必要なのか。効果的な特活を教えてほしい。」

「日本のやり方がそのままエジプトでは受け入れられないことがある。エジプトの机は重いので、日本のような掃除がうまくいかない。」

「実践を裏付ける理論についても教えてほしい。」

私は、木村先生の「OECD education 2030」のプレゼンを参考にして、「これから未来の教育は、主体的で自律的に活動できる人を育成しなければなりません。日本のいろいろな実践をこれから実際に見て、議論を深めていきましょう。」と答えておいた。

3. 福井大学附属幼稚園への訪問

エジプトの研修生は参観して、自由な遊びの中で学び合っている子どもたちに驚いていた。エジプトの幼稚園は、教科書があり、科目の授業が行われているからだ。子どもたちが遊びに浸り、学びに向かう力をつけていく日本のスタイルをどのように取り入れるかは難しいものがあると感じた。

また、言葉の壁があり、子どものつぶやきなどは、通訳がなかなか拾えない。教職大学院のスタッフが動画を撮って振り返りをするのは、効果的だった。

「日本には教科書がない。」と私は答えたが、少し説明不足だと反省した。幼稚園の教育においては、コンテンツは自由だが、コンピテンシーは共通であり、そのことを幼稚園指導要領で押さえておく必要がある。今回、アラビア語にも訳してあるので参考にしてもらえるとよい。

参観した子どもたちの活動としては、リサイクルの材料によるカラフルな「マフラー作り」、「お寿司屋さん」、「大きな手袋という絵本を題材とした自由激」であった。

4. 授業参観と見取りと幼小の交流クロスセッション

今回は、40名の研修生を受け入れているので、幼稚園と小学校に分かれて訪問することになった。クロスセッションで交流して、互いに見てきたことを伝えあう時間も設定した。

前回までの校長の研修よりも意識も高く、子どもの感動の展開を熱心に参観して仲間に伝えていた。

エジプトの研修生の見取りの視点は、ずいぶん日本の感覚とは違っていた。絵本の読み取りで言えば、日本だと「仲間と楽しく暮らす」とか、「みんなで助け合う」というようなことがテーマとなって話し合いを深めていくが、エジプトの先生方は、その絵本の中の気温のことや季節のこと、出てくる動物の習性等の違いをまず押さえるという。

附属幼稚園では、絵本の読みきかせで終わるのではなく、自分たちで劇にして演じていることで主体性や創造性を喚起することを大切にしている。そのことの意味を伝えた。ウサギちゃんは絵本よりかわいくスカートををはいている。狐にも名前が付けられていて「おしゃれなキツネちゃん」として登場する。会話も自由であって、見物の子どもたちも身を乗り出して参加し、思わず声を出している。一体感のある時間が展開された。

劇の終了後、先生が手作りのペープサートを活用した別の遊び方を提案した。それは「かくれんぼ」であった。さっそく代表の子どもが演じて見せた。見物の子どもたちも一体となって「かくれんぼ」を楽しんだ。絵本の世界の続きがパート2として、子どもたちの心の中に広がった。心地よい時間の中で指導をしているので、遊びの中から学びに向かう力が育まれていった。

お寿司屋さんについても、実際の生活の場面での子どもたちの見取りが随所に生かされていた。お金の計算や掲示物の文字なども必然性の中で生み出されていった。子どもの主体的な学びの意欲、実践、振り返りの中で、次の実践のアイデアがどんどん膨れ上がっていった。教え込みとは違う自由度のある活動の中での手ごたえをエジプトの先生方も感じていた。

このような活動の展開を今後追いかけていくことになる。長いスパンでの活動に慣れていないエジプトの先生方にどう説明していくかは、今回も難問である。彼女たちは時間の制約の中とても混乱していた。

クロスセッションの経験がないエジプトの教員のために、以下のことを指導した。

- ・知らない人に子どもたちの活動の流れのポイントを分かり易く伝える。
- ・ホームのチームで話し合った重要なポイントを伝える。
- ・自分の考え、感想、疑問を伝える。

また、エジプトの教員は、記録の作り方にも不慣れであったので、一日の記録の作り方についても以下のことを

指導した。

- ・今日、特に強く印象に残ったことを印象記憶で綴る。
- ・今後さらに問い深めたいと考えていることを書く。
- ・タイトルや小見出しには、その日のポイントとなるキーワードを入れる。

5. エジプト教員受け入れ校への事前説明

1月23日(木)に、福井市内の小学校の一日訪問を実施した。5人ずつのグループに分かれて、8つの小学校を訪問した。これらは、福井市の公立のごく普通の小学校である。附属とは違う一般の学校の様子を見てもらいたいと考えた。事前にこのプロジェクトの趣旨と依頼事項等を校長に説明しておいた。

その参観のポイントは、以下の通りである。この打ち合わせがとても大切で、学校の負担をかけずにエジプトの先生と子どもたち双方にとって成果が上がるために話し合いの場を持った。

- ・特別なことはせずに、普段通りの様子を見せてほしい。学校のリズムを壊さないようにしてほしい。
- ・校長室で校長先生から学校紹介のプレゼンをしてもらい。いくつか質問もさせてほしい。
- ・集団登校、朝の会、係活動、委員会活動、縦割り活動、清掃等の子どもたちの活動を見せてほしい。
- ・エジプトの先生方と子どもたちの交流ができれば、ありがたい。
- ・養護の先生や特別支援学級の先生からも、話を聴きたい。

6. 福井市六条小学校訪問

私が担当した班は、福井市の六条小学校を訪問した。訪問の当日はあいにくの雨だったが、エジプトで雨は珍しいらしく、エジプトの先生方は、元気に早朝7:30からの集団登校の様子を見学した。6年生を先頭に小さな子を真ん中に入れて、歩く速さにも配慮して登校して来る子どもたちと笑顔で挨拶をしていた。

校門で挨拶をする校長、教頭と黄色い旗を持ってサポートする見守り隊の地域のボランティアの人からも話を聞くことができた。地域が温かく学校を支えている様子が分かってもらえたと思う。

また、児童玄関の前ではリサイクルのアルミ缶回収も行われており、エジプトの先生方はその様子をカメラに

収めていた。また、朝の会の前に子どもたちが委員会活動をしていることも見る事ができた。一つは給食委員会の活動である。4年～6年生の委員が、その日の給食の食材を栄養成分ごとに掲示していた。先生の姿は見られない児童の自主的自発的な活動となっている。もう一つは、放送委員会の活動である。5年生と4年生の二人が、朝の校内放送の準備をしていた。上級生と下級生とのしなやかなやり取りが心地よかった。来年は、この4年生がお姉さん役を果たして下級生をリードすることだろう。子どもたちの文化として、すっかり定着している。

いろいろな学級で、子どもたちの活発な話し合い活動が展開されていた。特別活動だけでなく、教科等全体のカリキュラムの中で、「主体的で対話的で深い学び」に取り組んでおり、福井市の公立校の進化が見て取れた。

中でも圧巻だったのは、6年生の学活の時間であった。子どもたちは、高齢者から昔の遊びを教えてもらうという経験を生かして、今度は自分たちが昔遊びでエジプトの先生方をおもてなししようということで話し合いを続けてきた。先生にお聞きすると3時間費やしたという。

そこでは、「全員に体験してもらうための体験コーナーをいくつ準備するか」「どのような遊びが楽しいか」「説明は英語ではなくアラビア語で表記する」ことなどが話し合われてきたという。これまでの実践活動を省察して、次のサイクルに生かすという学びの連続性が素晴らしい。特活の目標がしっかりと身につけていると感じた。

先生はあくまでもファシリテーター役で、子どもたちの活動を温かく支えていた。エジプトの先生方は、子どもたちの準備した「福笑い」「習字」「そろばん」「あやとり」「おりがみ」「けん玉」「独楽」を体験した。アラビア語の説明文は、文法的には相当まずかったらしいが、何とか伝わった。グローバルな社会の中で多文化共生、コミュニケーション力を培うことは、日本の教育の大きな課題である。子どもたちは、それを実体験の中で為すことによって学んでいったのである。このようなアラビア語でのやり取りも子どもたちの発想だと知って、とても頼もしく感じた。

このような得難い体験が、8校で展開された。しかし、残念なことに、仲間が何を見て、何を感じて、何を学んだのかについては、時間の関係で研修の中で十分に共有することができなかった。せつかくの体験だったので、グループごとにまとめて、他の仲間を紹介することができたなら、もっと互恵的に学び合えただろう。また、私としては、彼女たちの省察を聞いて、次回の学校訪問につなげたいと考えていただけに、残念で仕方なかった。日本側からの

インプットだけでなく、エジプトの先生からのアウトプットにより、研修が編み込まれるとよい。このことについては、次回以降に生かせるよう、ここで明記しておきたい。

7. 福井大学附属義務教育学校前期課程の「わくわく交遊 Day」の参観

「1年生の2学級が協働で入学直前の幼稚園児を招待する『わくわく交遊 Day』の準備の様子」を参観した。

子どもたちが自分たちの遊びを紹介して、質問等に応えながら、より良いものに練り上げていく様子を参観した後、グループの話し合いの中で、次のような感想が出された。

「1年生なのに相手の言うことをよく聞いて、それにこたえていく中で考えが深まっていったので驚いた。」
 「先生は、あくまでもファシリテーターで、子どもたちが自分たちで話し合いを進めているのが印象深い。」
 「自分たちだけが面白いのではなくて、幼稚園さんも楽しくなることを考えるように先生が活動の目的を押さえた上で、子どもたちがアイデアを出し合っていた。」

「一つ疑問なのは、このような交流で互いのアイデアを紹介し合い、より良いものに改良していったが、最終的には一つに絞るのですか？」

「アイデアがたくさん出た場合、子どもたちで一つに絞るのか、絞らないのか。先生が最終的に一つにまとめるのか、教えてほしい。」

最後の質問については、全体の場でも紹介された。柳澤先生からは、「議論して一つにまとめていくことはとても重要だが、1年生の段階で全て子どもたちの手によって一つにうまくまとめていくのは、とても難しい。子どもたちは、結論を出していくまでにいろいろと話し合い、実際に試してみて、自分たちの活動を振り返り、結論を出していく。このプロセスが重要なのです。」というコメントが出された。

その後、自分たちの班でもう一度、話し合いの場を持った。子どもたちの活動を参観した省察を互いに行いながら、今一度、対話によって考えを深めていった。このようなアクティブ・ラーニングの研修によって、メンバーの意欲は一層高まり、私との距離もかなり近づいてきた。今回のメンバーは、これまでの校長やトレーナーとは明らかに違っていた。子どもの学び合いに興味があり、教師の立ち位置や役割にも関心があったからだ。

私は、ファシリテーター役として質問をすると、次のよ

うな答えが返ってきた。

「皆さんが担任だったらどうしますか？」

「一つには絞れないと思います。」

「子どもたちが、たくさんアイデアを出すことはエジプトでもよくあります。どうしたらよいか困っています。」

「アイデアの中には奇想天外で突飛なものも多く、その扱いに困っています。」

私は、彼女たちの困り感を確認したものの、すぐに回答せずに、次のように話した。

「皆さんは、長期の研修なので、今回の子どもたちの話し合いを追いかけていくことができます。どのように話し合いが進み、先生と子どもたちで、どのような結論を導き出していくのか注目しましょう。」

「1時間の話し合いで、すぐに結論を決めてしまうというのではなくて、長いスパンの中で、この活動がどのように展開していくのか確認していきましょう。」

8. 学習の連続性～「わくわく交遊 Day」を追いかける～

活動の連続性を追いかけるために、幼稚園、小学校の活動を再び参観することになった。

そして、参観の前に教職大学院のスタッフが、本日の参観についてどのような視点を持って臨むのか紹介をすることになり、私は、小学校の訪問について、次のようなプレゼンをした。

「前回の話し合いが、今回どのように発展していくのか、省察したことが効果的であったのか、見ていきたい。」

「本番のわくわく交流 Day に向けて、子どもたちは、たくさんを決めていかないといけない。」

「ボールを投げる距離をどうするのか、何分間練習をするのか、何回投げるのか等、いろいろと決めなければならないことがある。」

「子どもたちと先生が、どのように話し合い、どのように決めていくのか注目したい。」

「自分たちも楽しくて、幼稚園さんも笑顔になるために、どのようなアイデアが出されるかも見ておきたい。」

「ものごとを決めるためには、話し合いだけでなく実際に試してみることが必要だ。子どもたちは、金曜日の話し合いの後に、体育の時間でボールを投げて『わくわく交流 Day』の的あてゲームのリハーサルを行っている。」

「その授業だけでなく、それまでの取り組みの過程も含めて理解する必要がある。」

「試行錯誤をしたうえで、改めて活動を振り返り、みんなでいろいろなことを考え、より良いやり方に決めていくプロセスを見取ってほしい。」

9. 劇的变化。省察の共有と次の実践への意欲づけ (多目的ホールでの1年1組、1年2組の合同授業)

「為すことにより学ぶ」子どもたちの姿に感動した。多目的ホールで1組と2組が幼稚園児役、1年生役に分かれて、デモンストレーションを行った。先ず子どもたちがやってみて、その後全体で本日の活動を振り返り、一つ一つ課題解決していくプロセスを参観した。金曜日に私たちが注目していた班は、モンスターの的の数が4個から5個に増えていた。どうしてか聞いてみると、「材料が余っていたので、より難し的を1つ追加したの。」と答えてくれた。

幼稚園児役の子どもたちがボールを投げて的に当たると、モンスターの絵が宝箱の絵に変わり、至る所で歓声が上がった。投げる人の数も多く、ボールが強く当たって、的そのものが壊れてしまうようなことも生じた。予想しないことも実際に起こるのである。

「大変だ。的を直している間もボールが投げられて、直すことができないよ。」

「勝手に投げてきて、めちゃくちゃだ。」

「列になってもらって、順番に投げてもらおう。」

「的に当たったら10秒待ってもらおう。その間に的を元通りに直すから。」

「もっと的を高くして、すぐに当たらないようにもっと難しくしよう。」

かなり混乱した状態が続き、デモンストレーションの時間は終了した。先生二人が大きな白板の前に立ち、全体での振り返りが始まった。ベテランの女性の先生がファシリテーター役、若手の男性の先生が白板で記録役を務めた。

「幼稚園さん役の人は、実際にやってみて、何か困ったことはありませんでしたか？」

「こうするとよかった、というようなアドバイスはありませんか？」

先生の問いかけにたくさんの手が上がり、この活動の問題点が白板にまとめられていった。

「どうやったら良いのか、やり方を教えてくれなかった。何も説明がなかった。」

「的に当たっても何も言われなかった。」

「投げる順番がぐちゃぐちゃだった。」

「的の絵が宝物のままでモンスターに直されていなかった。」

「一人5回も投げるので時間がかかりすぎた。」

「待っている時間が長すぎて退屈だった。」

これらの声に対して、先生が次のようにつないだ。

「みんな笑顔になれたかな？幼稚園さんがみんな笑顔になるためにはどうしたらいいと思う？」

「どう解決するのいいかな。」

「アドバイスを批判されたと考えずに、幼稚園さんがみんな笑顔になるチャンスだと考えてね。」

これまでグループで考えていたことを実践してみても振り返る時間となった。これまで仲間と「これでいい」と考えてきたことも、実際やってみると、あれこれ不都合なことや思いもかけないことが起きてくるものである。

子どもたちからの改善案は以下のようなものであった。

「列にして座らせておいて、やり方を先に教えておこう。」

「実際にやり方をやって見せてあげて、分かってもらおう。」

「説明が終わったら、やり方が分かった？と優しく聞いてみよう。」

「的に当たったら、笑顔でおめでとうと言おう。」

「すごいね。もう少し。惜しい。頑張る。というような言葉もかけてあげて励まそう。」

「何も当たらない幼稚園さんにも、次はきっと当たるよと声をかけよう。」

「当たらない子には、少し前から投げてもいいことにしたらどう？」

「的に当てができるコースを1コースから2コースに増やそう。そうすると待つ時間が短くていいから。」

「待っている人のための練習場を作れないかな。」

「簡単な的や難し的などを入れて、的の数を増やそう。今日は4つだったけれど、5つにしよう。」

子どもたちは、実践を振り返って、仲間と共にどのように改善していくとよくなるかを考え合う時間となり、集団としての共通理解や意欲を一気に高めることができた。

ここで注目したいことは、時には個人で、時には小さな集団で、そして、時には大きな集団で、省察と実践のサイクルを回しているということである。学級の中だけに学びが閉じていないので、子どもたちだけでなく、教師の協働も共通の時間の中で展開されている。TTの指導形態をとる中で、教師も学び合っている。働き方改革の中での人

材育成という視点からも、大いに評価したい。

このような子どもたちの主体的な取り組みを優しく支えているファシリテーター役としての教師の存在をエジプトの先生方は高く評価していた。

「子どもたちが意見を出しやすい雰囲気をつくっている。」

「自分たちが目指すテーマに向けての話し合いになることを意識している。」

「子どもたちのコミュニケーション力を高める授業の工夫が素晴らしい。」

これからの教育で必要となるコミュニケーション力、エージェンシー、レジリエンスというような資質能力を計画的に継続的に高め、鍛えていこうという教員のスタンスは、極めて重要で、これからの授業づくりや学校づくりの中ではまさに世界規準であると再認識させられた。

子どもたちは、遊びの中で主体的で対話的に深く学び合っていた。このような質の高い研修は、日本にいてもなかなか実現するものではない。長期にわたり学校や園を拠点として現場を開いての研修だからこそ学べるのであり、本学の教職大学院の研修の最も優れた取り組みであると言える。エジプトの先生方は、納得し大いに満足していた。

10. 「わくわく交流 Day」の本番

「わくわく交流 Day」の本番では、新入生の幼稚園児、保育園児が保護者と共に参加した。1年生はホスト役で、幼稚園さんが入学に関わる心配や不安がなくなるように、これまで準備を重ねてきた。

行事の内容としては以下のようなもので、子どもたちが司会進行をして進めていった。

- ・セレモニーとしての副校長の挨拶
- ・校歌斉唱
- ・1年生から、年間の主な行事のポスター説明
- ・教室でランドセルに教科書を入れるやり方を教える
- ・プリントに名前を書いて、花丸を付ける
- ・掲示物の記録を活用して、先生方の紹介をする
- ・学校の中のいろいろな部屋や教室の秘密を教える
- ・モンスターにボールを当てて、宝物を手に入れるゲームをする
- ・1年生の感想
- ・幼稚園さんの感想
- ・先生による全体での振り返り
- ・1年生の後始末

行事終了後、1年生はすぐに振り返りを書いた。明日、皆で共有するためである。リフレクションという名の自己評価を次のアクションに生かしている。まさに指導と評価、評価と指導の一体化である。

参観後、エジプトの研修生は、各グループで振り返りを行った。私は、今回の活動が3段階で成長していったことを説明した。教師が1回で指導しきってしまうことは、日本の学校でも数多くみられるが、附属では長いスパンでの活動を実践している。そして、そのことの意味を共有するために、長いスパンでの授業研究を教師は大切にしていると伝えた。更に私は、今回の参観の意義について、次のように話した。

「子どもたちの活動は、3ステップで成長していた。初め、子どもたちは、喧嘩をしていた。それで、先生が指導して活動が1回で終わったら、何も成長しない。2段階目の活動としてリハーサルを実際やってみて、子どもたちは自分たちの考えを確かめ、修正することで本番に向けて意欲を高めた。

そして、本日、今までの活動の経験や学びを生かして、子どもたちは、幼稚園さんが笑顔になるような取り組みに成功した。一つのグループを追いかけて見ていったことで、グループとしての成長や一人一人のメンバーの成長を見取ることができた。子どもたちは、これまでの話し合いや活動により本日成功したことで、とてもうれしい気持ちになっている。

エジプトで親からのクレームが多いということを知ったが、先生がいくら説明説得をしても、なかなか理解はしてもらえない。大切なことは、問題のあった子どもが、このような活動の中で成長していった、その記録を保護者に伝えることで、対応は自ずと変わってくるだろう。そのような記録が、とても大切になる。

それは、一人の先生がやるというのではなく、仲間で協力してやるのが大切になる。皆さんが、今、チームのメンバーとやっているような授業研究会を是非、エジプトでもやってほしい。きっとできます。私は校長の時、このような取り組みを行い、多くの保護者が喜び、協力してくれたという経験をしました。皆さん、エジプトでもやれます。チャレンジしましょう。」

II. エジプト教員の大学でのカンファレンス

1. 日本での学びをエジプトで生かすことの難しさ

エジプトの先生方は、福井大学附属幼稚園、福井大学義務教育学校、福井市の六条小学校、京都市の小学校、長野県の伊那小学校を実際に訪問し、日本の特別活動の様子だけでなく教育活動全般を学ぶことで、多くの刺激を受け、大変好意的に日本の教育システムや教育活動を評価していた。そのことは、まぎれもない事実ではあるが、その一方で、自分たちのエジプトの状況とのギャップに苦しむことになった。

「エジプトでは、時数や扱う内容等、上からのいろいろな制約があって、自由に教師が教育をデザインすることができない。」

「日本では、大変自由で柔軟性を持って教師も子どもたちも学び合っていて、とてもうらやましい。エジプトとはずいぶん違う。」

「私たちはどこから手を付けたらいいのか分からない。教えてほしい。」

このような声は、これまでの派遣団の皆さんにも共通したものであった。我々スタッフは、そのことを十分承知して励まさないといけない。そのことを皆で共通理解した上で、私は、班のメンバーに次のように伝えた。

「今取り組んでいるメインの活動を取り上げて、それをさらにブラッシュアップしてより良いものにするにはどうしたらよいか、みんなで考えてみましょう。」

「日本で学んだことを取り入れて、皆さんの学校の核となる活動にプラスαを加えて再構成してみましょう。」

「一回だけの活動で閉じて終わるのではなく、その前後の活動との関連、つながりを意識してプランニングしてみましょう。」

しかし、エジプトの現実は大変厳しいものがあるようであった。

「トレーナーが監視に来て、勝手なことをしていると指導を受ける。」

「いくら良いものを考えても上が認めない。止めなさいと言われてしまうから、考えても無駄だ。」

エジプトの教育省、トレーナー、校長と教員の間には根深いわだかまりがあるようだ。なかなか日本の学校の様にはいかないのである。いわゆる権力のピラミッド構造が、教員を支配し、苦しめている。

私は、勇気づける必要性を改めて感じ、「皆さんが、過日発表した自分たちの学校のプロジェクトは十分魅力的なものだったから、それをもう一歩ブラッシュアップして、次やる時にどうするかプランニングをして、多くの皆さんに伝えていきましょう。十分魅力的で素晴らしいのだ

から、自信を持ってステップバイステップでがんばりましょう。」と笑顔で励ました。

これを聴いた通訳の人は、英語で力強く呼びかけた。

「Never give up !!」

これに対して、他のメンバーも笑顔で、

「Never give up !!」

と笑顔で応じたのだ。教育現場の最前線で戦っている彼女たちは、実にたくましい。

2. 子どもたちの合同リフレクションの参観

2月4日の「わくわく交流 Day」の本番を参観したエジプトの研修生と1年生の担任二人との合同リフレクションの場が設定された。実践を参観して、いろいろなことを思い、考えていた研修生にとっては、またとない時間となった。いろいろな質問が出され、手は挙がり続けた。中には何度手を挙げても指名されないで、自ら立ち上がって話を始める人もいた。ルール違反と言えばその通りだが、引っ込み思案の日本人からすると、その意欲的な姿は、うらやましく頼もしいものであった。

発表会が何故、熱を帯びたものになったかと言えば、参観が発表会の1時間だけでなく、それ以前の子どもの葛藤や失敗、試行錯誤の時間についても継続的に参観してきたことが大きかった。子どもたちの成長が見取れたからである。通常であれば、このような参観はまず不可能で、発表会に子どもたちが頑張っている、「あれは、附属だからできるのだ。」というようなコメントで終わってしまう。その最終の発表まで、どのようなプロセスで子どもたちが学びをつくり上げてきたのか、教師がいかにそれを支えて導いてきたのかが見えてこない。

今回のケースで言えば、事前の練習会で隣のクラスから、

「今の説明では、分からないよ。」

「待つ時間が長すぎて退屈だった。」

「簡単に的に当たってつまらなかった。」

「うまくできない子にとっては、難しすぎるよ。」

「笑顔がないからとても緊張した。」

「的に当たった時に褒めてほしかった。」

等の振り返りの声が出された。子どもたちは、それらの省察を次の実践に生かすことで修正を加えていった。また、教師も話し合いのポイントを板書しながら、大切なことを確認し、子どもたちの自主的な活動を支えていった。そのような歩みをエジプトの研修生が連続で追いかけていたからこそ、今回のプロジェクトの素晴らしさを理解し

評価できたのである。学年の取り組みとしてファシリテーター役に徹したベテランの教員と若手の教員の協働の素晴らしさについても学ぶことができた。日常的に授業を協働でつくり上げることが若手の育成において極めて重要であり、それは、カリキュラム・マネジメントとして時間割の工夫と関連があるということも理解できたのである。

質疑応答は十分に行われ、児童の椅子に座った研修生は、とても満足していた。また、日本人の先生方にとっても、自分たちの実践を海外の他者と共に振り返ることが、より深い学びとなり、新しい発見にもつながり、自己有用感を高めることにつながった。このような授業研究は、日本が得意とする学校文化であり、世界が注目する「lesson study」である。稲垣忠彦氏が言うように、教師の成長のためには、授業公開と仲間との授業研究が決定的に重要なのである。

エジプトの研修生と附属の担任の先生方との質疑応答の中で、特に印象深かったことを紹介する。

Q:「我々エジプトの教員へのアドバイスはありますか？ 大切だと思っていることをアドバイスしてください。」

A:「子どもの発意を何よりも大切にしてほしいと思います。」

「その際、教師は、どんな力を子どもたちに付けたいのかということをはっきりとすべきだと思います。」

「子どもたちが、1年後にどのような姿になってほしいのかということ仲間と共有しています。」

「その上で、子どもたちの発意とのマッチングを考えるべきだと思います。」

エジプトの教員の食い入るような眼差しと温かい拍手、うなずき合う姿が印象的で、とても心地よい時間が流れていった。今回の第三バッジの目的の一つが、授業研究である。研修生の今回の経験は、エジプトのこれからの「lesson study」の発展に必ずつながるだろう。特別活動だけでなく、教科、領域の授業研究でも有効であるということ研修生は理解していた。このことは、第1、第2バッジの校長研修では見られなかった第3バッジならではの特筆すべき研修成果であった。

あるエジプトの研修生は、自分たちの学校でワクワクする活動をプランニングするための一つの実践として、「展覧会を開催してギャラリーを作る」ことを生き生きと話してくれた。

子どもたちにこれまでやったことのない新しいことに挑戦させてコミュニケーション力を身に付けさせたいという。

柳澤先生から、以下のようなエジプトが推進している特別活動の目的についても紹介されていたので、研修生のモチベーションは大いに高まった。

- ・自律的活動を重視して子どもたちの表現力を培う
- ・自己決定の力を培う
- ・共感的な理解力を高める
- ・相手の差異を受け入れる
- ・自分たちのコミュニティにおける義務と責任を果たす

3. 伊那小学校が考える子どもたちの活動の条件

伊那小学校が提案する「子どもたちの活動の条件」についても説明を行った。理由としては、先進的な探究学習を長期にわたって継続している伊那小学校の教育の特質を理解して、エジプトの教育に生かしてほしいという思いがあったからである。

また、福井大学附属幼稚園や附属義務教育学校の遊びや学びと伊那小学校の教育活動との共通性、親和性を意識しての事であった。

子どもたちのやりたいことやアイデアは、多様である。どのように絞り込んでいくかは、難しい問題ではあるが、伊那小学校では、以下のような条件を満たすものとして絞り込んでいくということを伝えた。

- ・子どもたちが、その活動をすることでワクワクして、意欲を持つ課題である。
- ・みんなで役割分担しながら活動できるものである。
- ・その活動が、挑戦的なものでレジリエンスが培われるものである。
- ・その活動が1回で終わるものではなく、次の活動へと連続する種となるものである。

研修が深まる中、このような教師の関り方や支援についても研修生は理解できるようになった。大変な成長ぶりである。

4. 自分たちのプランニングを記録にまとめる

エジプトに戻って、多くの人に自分たちのプランニングを説明するときに、文章になった記録は、とても重要になる。そのために書く時間を保障した。

なお、レポートにまとめる際のポイントについても説明を行った。具体的には、以下のようなことである。

<目的>

- ・なぜそのような活動をするのか
- ・その活動の目的は何か
- ・その活動でどのような力をつけたいのか
- ・エジプトのガイドラインの目的との関連を明記する

<子どもたちの状況>

- ・子どもたちは、どのようなことに興味関心を持っているのか
- ・展覧会を開催するために、子どもたちは、どのような意見を目安箱に入れるのか

<実践の展開>

- ・どのように話し合いを始めるのか
- ・個人レベルでのアイデア、グループでの話し合い、全体での話し合いをつなげていく
- ・リハーサルをして、それを振り返り、本番に向けての話し合いを持つ
- ・本番で自分もみんなも笑顔になるために、どうするとよいか話し合う

<省察>

- ・本番で実際にやってみてどうだったか、皆で振り返りを行う
- ・今回の活動で学んだことを次の活動にどのように生かすかを話し合う
- ・今回の活動で工夫したことについてまとめる

5. 二つの実践プランの誕生

エジプトの研修生は、「展覧会を開催してギャラリーをつくろう」というアイデアを中心に話し合ってきたが、いざ、実際に自分の学校でやるとなると別の活動の方がいいと考える先生が一人出てきて、「1年間の最後に感謝祭のパーティーを企画しよう」というプランニングが誕生した。自分の学校に帰った時にどのような活動をやりたいたいのかを吟味しての結果である。そのポイントを傾聴すると、いろいろな活動を経験して1年間の最後に大きなプロジェクトを子どもたちの手で企画させたいというものであった。

具体的には、子どもたちの話し合いでいろいろなアイデアが出され、劇や歌や美術で表現していく。ここでは、いろいろな教科の先生方が協力をする。子どもたちは、こ

れまでの経験の省察を生かして企画していく。先生は、ファシリテーターとして、あくまでもエジプトの特活のガイドラインに沿って、子どもたちに必要な力をつけたいと考えていた。

ここで重要なことは、「展覧会を開催してギャラリーをつくろう」で話し合ったことが、生かされていたということである。新しいことに挑戦することやコミュニケーション力を高めるという目的が、明確に押さえられていた。仲間との話し合いで気づいたことを取り入れて新しいことにチャレンジする姿勢は、自律的な学びの展開そのものであり、称賛の拍手を送りたい。

「ギャラリーをつくろう」も仲間との話し合いで練り上がっていた。ガイドラインに沿っていることや目安箱に子どもたちが意見を入れることも十分意識されていた。そこでは現実的な実践が計画されていた。自分たちがこれまで学習して残しておいた絵や折り紙や農産物等が使われ、お金も作ってマーケットで売り買いが行われる。お金の計算で算数の学習もできるわけで、そこでは教師間の協働も意識されていた。

注目される発言がいくつかあった。

一つ目は、このギャラリーづくりの学習の中で、普段何かと気になる男の子も仲間と一緒に笑顔になっていく。だからやる価値があるという発言であった。子どもたちの自主的で自発的な活動の価値を再認識することができた。

二つ目は、このギャラリーづくりの学習をする際に、学校の教員全員で何故やるのか、話し合いの場を持って、目的を共有するというものであった。教師の協働のマネジメントの重要性を再認識することができた。

三つ目は、音楽や美術の専門家を地域の中や保護者の中から探して、参画してもらうというアイデアだった。地域に開かれた教育課程が、エジプトでも重要視されていることを再認識することができた。

以上、私の担当した班では、二つの実践プランが誕生し、互いに刺激を与えながら、帰国後のアクションプランが作られていった。

6. 福井大学附属義務教育学校学年部会の振り返り

エジプトの研修生は、ワクワク交流会の実践を追いかけ、1年生担任の二人の先生方の振り返りにも参加できて、とても多くのことを学び合った。

その中で次のような質問がエジプトの先生から出された。

「この活動を行うにあたって、先生方はどのように子どもたちのアイデアを絞り込んでいったのですか。」
 「子どもたちにどのような力を身につけてほしいのですか。」

「この活動を通して、子どもたちにどのような姿になってほしいのですか。」

「この活動を行うにあたって、教師自身の目指したことと、子どもたちが、やりたいこととの折り合いをどのようにつけたのですか。」

附属の二人の先生から、附属が大切にしていることを二つ紹介していただいた。

一つは、授業づくりを通して日常的な対話を大切にしているということであった。附属では、カリキュラム・マネジメントに工夫を凝らし、できるだけ教師が協働して授業実践に取り組んできている。それぞれがバラバラの実践をするのではなく、ティームティーチングで長いスパンの活動に取り組んでいくことを重要視しているという。

もう一つは、働き方改革を意識しているということであった。附属では、正規の時間割の中で教師同士の話し合いが可能となるような工夫がなされている。何でも「放課後に打ち合わせをしよう。」というのでは、学校が不夜城になってしまう。時間割を工夫して、協働で授業づくりについての話し合いの時間を確保していることがエジプトの研修生に伝えられた。

7. 特別支援教育についての講義で学ぶ

エジプトにおいてもスペシャルニーズの必要な子どもたちは増えている。しかし、一般の公立校での対応は遅れていて、意識の高い保護者は、高い月謝を払ってでもEJSに子どもたちを通わせるという。しかし、EJSにおいても特別支援の必要な子どもたちへの対応は不十分で、先生方は悩んでいる。エジプトの先生方のスペシャルニーズへの関心は極めて高い。

今回の研修の中で、各EJSの特別支援の状況を話し合い、情報を共有したことは有意義であった。これを受けて、本学の松木理事から「自己肯定感の低い子どもにどう関わったら良いのか」というテーマで特別講義があった。

「最後までやりぬく経験を沢山する。そして、そのことをたっぷりと誉めてやる。」ということがとても重要だが、なかなかそれができない状況がある。今まで何をやってもうまくいかなかったという経験ばかりの子どもは、少しぐらいの成功体験では喜ぶことができない。いっぱい

失敗をしているからだ。

抜け出す方法は、テストそのものよりも、その先にあることを重視する「未来を創る活動であり、学習」だと松木理事は強調した。

また、発達障害の子が疎外されないように、その子を含め、仲間との子ども同士の関係性の中でコミュニケーション力を高めるとともに、個別の学習のなかでの支援策の重要性も示された。それは、国語や算数ではなくて簡単な物語でいいので、その物語の登場人物の心情を読み取る教育が必要になるという話であった。物語の人物の方が、生身の人間よりも考えやすいからだ。人の気持ちを察するパターンを学習していく必要がある。研修生は納得し、満足していた。今後、エジプトの教員研修において、特別支援教育の内容を盛り込む必要性を感じた。

8. 3週間のエジプト研修の振り返り

写真を交えてこれまでの3週間の研修を大学スタッフのポリンさんが振り返った。その後、各班の代表が、3週間の中で最も印象深かったことをスピーチしてつないでいった。主な発言は以下の通りである。

「日本の特別活動や教育全般を見て、強く印象に残ったことは、何より子どもたちの主体性が大切だということだ。」

「日本では、子どもたちの関係性を良くしていくために、特別活動を通してコミュニケーション力を育成している。」

「子どもたちの話し合いをとっても大切にしている。教師主導ではなく、子どもたちが相互に話し合いながら物事を決めている。」

「子どもたちは、ホワイトボードなども使って、自分たちの考えを絵や文字で自由に表現していた。」

「教師は、ファシリテーターで子どもたちはセルフスタディで学び合っていた。」

「目標が大切だ。この活動は何を目的にしているのか。子どもたちにどんな力をつけようとしているのかが明確でないといけない。」

「子どもたちがやりたいことを発見する、その様な学びのシステム、仕組みが大切だ。」

「スペシャルニーズの子どもたちへの先生方の対応が温かく素晴らしい。」

「実践とリフレクションが繰り返されていて、深い学びにつながっている。」

「子どもたちは、経験をシェアしながら成長している。」

「実践して振り返り、学んだことを書いている。書く指導が大切だということも学んだ。」

「子どもたちの間に愛がある。温かい人間関係が随所に見られた。」

「子どもたちが納得し、満足して学び合っている姿が印象深い。」

「先生方は、ゴールをはっきりさせて、そのためにどうするとよいか話し合っている。筋道が通っていて、計画が作られている。」

「子どもたちがよく考えて、アイデアを出して活動を進めているのが素晴らしい。」

「先生はノータッチのように見えるが、とてもよく子どもたちの話を聴いているし、子どもたちの様子を観察している。」

エジプトの研修生の眼を通して、附属や教職大学院が大切にしている教育の在り様が評価された。このような海外の第三者評価のおかげで、今後の私たちの実践に弾みがついた。

9. クロスセッションの成果についてのシェアリング

クロスセッションで班のメンバーは、「展覧会を開催してギャラリーをつくろう」、「年末に感謝祭のパーティーを開催しよう」というプランについて話をし、多くのコメントを得て帰ってきた。コミュニティの内と外を意識して交流していくことで、自分たちのアイデアやプロジェクトの課題や良さが明確になる。

「自分のプレゼンに多くの反応があって、うれしかったです。」

研修の中でのリズムづくりは、極めて重要である。それは、企画する時に日程に細かく盛り込むべきものではない。研修の中でのリズムというか、研修生の様子をよく見取った上で、絶妙のタイミングで盛り込まないと意味がないからである。同じことをやるのだが、そのタイミングのよし悪しで、結果として雲泥の差が出てくる。今回の企画は、まさにこのタイミングのジャストタイムであった。

10. エジプト教育省トップのコメント

各グループのエジプトの研修生のプレゼンを聴いて、教育省トップは、熱を込めて子どもの主体性、柔軟性、協働性、継続性、教師の同僚性の重要性を研修生に伝えた。感動的なスピーチで研修生をねぎらい、励まし、高く評価し、期待したので大きな拍手が会場に響いた。本来、教師

とは、このように子どもたちのやる気に火をつけ、モチベーションを高めさせることを大切にしなければならない。そういう意味で、この高官は、極めて優れたコンソルテーションをしたことになる。この日まで日本で研修を積み上げてきている研修生だからこそ、スピーチの内容が心に深く響いていた。以下、その主な発言を紹介する。

「皆さんが福井で学んだことは、エジプトの多くの先生方や保護者の方々にも伝えてください。」

「皆さんは、エジプト180万人の教員のトップとして、昔の古い教育のやり方を脱却した新しい学びの大切さを仲間の教員に伝えないといけない。それは、皆さんの責任です。そのことを神様は見えていますよ。」

「エジプトの新しい教育の方針の中では、子どもを黙らせてしまう教師主導の教え込みではない教育が大切だと示されています。」

「教師は子どもを大切に、子どもの学びがより良いものなるようにしなければいけない。」

「いろいろな花が咲いて花畑は美しくなる。子どもたちの個性を生かした教育が大切だ。」

「子ども同士が学び合う中でコンピテンシーを身に付けていくことの重要性がエジプトにおいても明記されています。」

「教師の協働が重要です。子どもたちが共に学び合うには、教師も共に学び合わなければならない。」

「失敗もするだろう。その失敗の経験を生かして、なぜ失敗したのかを共に考え、長期的な視野で実践を続けていかないといけない。」

「何のためにその活動を行うのか、目的を明確にして計画を立てることが極めて重要になる。我々エジプト人は計画性に欠ける。見通しを立てて、実践していかないといけない。」

「特別活動には、いろいろな活動や取り組みがあるだろう。あまり画一的にとらえないで柔軟性を持って取り組むことが大切だ。その活動で子どもたちがどのように学んで行ったかということが大切になる。」

「子どもたちは、ぶつかっていいのです。話し合いをして解決していくその道筋が大切なのです。」

適切で温かいメッセージに対して、研修生からは大きな拍手が沸き上がった。エジプトの未来の教育を共に考える仲間同士の絆が一気に高まった。

トップの言葉は重い。さすが教育省のリーダーである。この研修そのものの意味づけ、価値づけを行うとともに、研修生の学びの意欲に火をつけた。

このような体験を福井大学連合教職大学院の学校改革

マネジメントコースの院生も経験できないものか。県教委や市町教委と協働して、研修制度等を見直す中で考えていきたい。

11. 「ベンチを作れ」 実践コミュニティづくりの議論

実践コミュニティの構成メンバーやその成長について、「コミュニティ・オブ・プラクティス」の第3章を基に話し合った。アラビア語による訳があまり適切でなく、メンバーはかなり苦労したが、コミュニティの参加の度合いについては、図で解説がなされていたこともあって、研修生のメンバーは自分たちの学校の様子と重ね合わせて学ぶことができ、実践コミュニティについての理解を深めた。

その議論の中で「ベンチを作れ」というウエンガーの指摘は、敵対関係になりがちなエジプトの状況の突破策として、かなり有効であった。いかにして学び合う渦をつくって、時間をかけながら反発するメンバーをコミュニティの真ん中へと巻き込んでいくかが大切だと説明した。敵対関係になるのではなく、出入り自由のベンチを作ることの重要性を研修生は、自分たちの経験を通して理解することができた。

「そのようなコミュニティが大切なのに、エジプトでは試験、試験で分断されている。」

「日本においても、そのような状況がある。でもその中で動き出すことが重要なのだ。3人ぐらいのコアのメンバーで協力して仕掛けていこう。小さなコミュニティでいいのだ。エジプトに帰ってから仕掛けていこう。」

「今の私たちは、この図のどのあたりですか？」

「日本に来た時と比べると、今は研修を重ねて随分真ん中のコアの部分にいらっしゃいますよ。」

大きな拍手が起きた。この研修で自分たちが経験した学びのスタイルをこの「コミュニティ・オブ・プラクティス」の中で確認し、理解したようである。この時の学びを白板にまとめ、自分たちの研修の成果を皆で喜び合った。「コミュニティ・オブ・プラクティス」で書かれている内容が、創作的なデザインとして見える化されたことが、とても新鮮で驚かされた。後述するが、この時の白板を元にして、彼女たちは、本研修の最終レポートの表紙をデザインしていったのである。

研修生たちは、研修のまとめとして、これまで苦労して長い時間をかけて日本で学んできたことを白板の中に見える化した。そして、満足そうな笑顔で写真を撮った。

<自分たちの学びに見える化した白板の前で>



12. リーダーは「廊下を歩き回って仲間をつなぐ」

今回のエジプトの研修生には、2つミッションが与えられていた。特別活動のプランニングと授業研究のプランニングである。後者のプランニングは、「コミュニティ・オブ・プラクティス」の第3章から第4章を読み込んで、自分たちの学校の現状の中で、協働的な授業研究の開始についてシュミレーションすることになった。

しかし、実際に議論を進めていくと、かなり混乱した。授業研究を特活で考えるのか、教科も含んで考えていくのか、また、両方をリンクさせるのか、迷っていたのだ。ヤスミン先生に通訳してもらい、丁寧に説明をしてもらって、ようやく落ち着いた。

結論から言えば、日本で見たように、授業研究は、特別活動だけでなく教科でも行うもので、時には幼稚園や小学校の園校種を越えて行うものであっても良いということが理解できたようである。ここで痛感したことは、エジプトの状況を十分に理解した上で、研修生の悩みに共感してファシリテートすることの重要性と困難性である。どうしても、支援ではなく、私自身、日本ではこうしているという指導に陥っていたように思う。現実の課題を踏まえて、エジプトでの困難なチャレンジをする研修生の悩みをよく聴いて応援するスタンスに欠けていたと反省した。

時間をかけて話を聴き、そっと背中を押すようなスタンスで関わることを心がけることで、ようやく研修生は、

自分の学校でのプランニングにとりかかるようになった。なかなかの産みの苦しみであった。振り返ってみると、今回、教育省の視察等で、このサイクルの日程が、実質2日分ほど縮減した。このせいで話し合い、考えをまとめ、記録として書き表す時間が不足した。この予定の変更は、運営側の事情としては致し方ないものの、研修生の立場から言えば本当に痛かった。

次回以降は、最後のまとめの段階なので、時間を十分に確保し、研修生の話も聴いて、じっくりと書く時間を保障しなければならない。

ここで、エジプトの教育事情に精通した通訳の確保についても改めて明記しておきたい。本研修は言葉の壁があり、通訳の確保が必要条件となる。聞きなれない教育用語が飛び交う中での通訳は、本当に大変なことだろう。併せて、病人が出るとその対応で人がとられてしまう。余裕を持った通訳の体制整備が必要である。しかし、現実には勤務の関係等で通訳はなかなか固定できず、継ぎはぎで配置することになった。経験のない通訳が途中から参加するようなことで、何とかやりくりをした。質の高い通訳の確保は、大きな課題である。

今後、慣れた大学生の通訳が就職等で欠けていくと、事態は、より困難なものとなるであろう。通訳は研修の成功失敗を決める重要なスタッフであるので、次回以降の改善が必要だ。

13. ファイナル・クロスセッションに向けて

ファイナル・クロスセッションに向けて、下記のようなことを全体で共有した。

旧来の学校では、短時間にたくさん問題を解くような指導と評価が続けられてきた。効率よくこなすことができれば高い評価となり、できなければ低い評価となった。その際、悪いのは子どもであり、教師は教えたのにできない子どもが悪いと理解してきた。

そこでは、1時間の中での完結する授業がイメージされていて、長い時間をかけて複雑で困難な課題にチャレンジするようなことは考えていなかった。

しかし、現実には未来に向かって、より複雑で混沌とした方向に向かっている。そのような答の見つけにくい社会に生きる子どもたちに、どのような力を身に付けさせるのか。そのコンピテンシーは、教える身に付くものではない。仲間と共に持続的で発展的な実践をする必要があり、それを1年、1年と繋いでいかなければならない。

その一つの例として、福井大学の20年に及ぶラウンド・

テーブルの実践が紹介された。初めは、20名の参加で始まったが、多い時には900名の参加にまで拡充した。最初は、小さなコミュニティから始まった。エジプトでもコアなメンバーから改革が始まる。今回の研修で仲間と共に協働で考えた素晴らしいアイデアは、記録しておくことよい。文章に書き留めておくと、時間が経っても思い出しやすいからだ。記録がないと同じところをグルグル回ることになり、発展性に欠ける。記録は、コミュニティの成否の大きなカギになるということを皆で共有した。

その後、ファイナル・クロスセッションに向けてのレポート作りが始まった。その枠組みは、以下の通りである。

14. ファイナル・クロスセッションのレポート作成と交流

研修の最終プログラムとして、以下の3点に留意して最終レポートを作成することになった。

- ・メインテーマを入れる
- ・自己紹介をする
- ・研修で発見した印象深いことを3つまとめる

目的は、これまで交流してこなかった他者とのクロスセッションで、自分のこれまでの実践を意味付け、その価値をより深くすることであった。これまでの研修で発見したり、考えたりしたこと省察が、よりクリアなものになっていた。それは、主体的で対話的な学びによって、それぞれが深い学びを手に入れることでもあった。

この最終レポートは、今回の研修の自己評価であり、私たちスタッフが、研修を評価する上での有効なエビデンスにもなった。また、研修生が自国に戻って、いろいろな場面でプレゼンをする際の貴重な資料であり、今回の発表経験は、自国に戻ってから困らないようにという配慮のものとデモンストレーションでもあった。

私は、少し緊張した面持ちでクロスセッションの場に臨んだ。理由は、自分たちが企画し実践してきた今回の研修を研修生たちはどのように理解して、どのように評価するかということが判明するからである。理解が浅いか、誤解されているとか、自国に戻ってから大丈夫であるとか、いろいろな思いがよぎった。

私のグループでは、5人の研修生が報告をしてくれた。結論から言えば、それぞれが自律的に学んでいて、金太郎あめ的な画一的な理解ではなくて、自分の学校の実態に応じた理解やアクションプランを考えていたことに驚ろかされた。今回の研修の手ごたえを感じたというより、恐れ入ったという感じで、その学びの深さ、真剣さに圧倒された。5人の研修生の語りの概要を以下に紹介する。

(教員A:アラビア語と特活教員の報告)

「私は、今回の研修で多くのことを学びました。テーマとしては、『これからの教育は、グループのメンバーによる協働が最も重要になる』ということです。具体的に大切にしたいことをキーワードの形で報告したいと思います。

- ・短期ではなく長期プロジェクトが重要
- ・保護者や地域への説明責任は、子どもたちの学びの姿で語る
- ・計画の柔軟性が重要
- ・実践し省察して適切なアクションを選択する
- ・子どもたち自身がやる気を出すことの重要性
- ・仲間との生活の向上のために掃除も自分たちで創意工夫する
- ・他者とのコミュニケーション力を高める
- ・実践の後の省察が重要
- ・省察を継続することの重要性
- ・子どもたちの幸せを真ん中において教育をする
- ・先輩も後輩も私も、みんなが幸せになる活動を実践する
- ・子どもたちがワクワクする活動を企画する
- ・実践コミュニティは、小さくスタートする
- ・記録をつくることの重要性
- ・実践記録で学び合う
- ・コーディネーター役、ファシリテーター役としての教師の立ち位置
- ・縦の関係の学び合いの重要性(小学校低学年と幼稚園児の学び合い)
- ・内のメンバーだけでなく、外のメンバーともつながる
- ・教科も特別活動もコミュニティの中で協働実践していく

私は、日之出小学校を訪問しましたが、校長先生が太陽のように明るく、柔軟に学校づくりを行っていました。この自由度、柔軟なマネジメントが素晴らしいと思いました。エジプトに戻ってから、私も福井で学んだことをアレンジして、エジプトの実情に合った現実的な一歩を踏み出したいと思います。」

この研修生は、本研修が目指していたことを実地的に理解していた。研修を提供した者としては、「伝わっているかな。」という不安な思いでいたので、正直ほっとした。

(教員B:アレキサンドリアの特活教員の報告)

「私は、はじめ、たくさんの疑問をもっていました。伊那那小学校のプロジェクト学習はとても素晴らしいものでしたが、多くの質問もありました。それが福井での研修の中でリフレクションをしていくうちに、どんどん分かっていきました。附属小学校や文珠小学校を訪問して、多くのことを見せてもらい、学ぶことができました。

全体を通して印象深かったことは、全ての先生方がつながり合って実践と省察を続けているということです。文珠小学校では、地域の人も加わって「味噌づくり」を行っていました。4人のグループで協力をしながらやっていました。先生や地域の方は、コーディネーター役として子どもたちを支えていました。先生と地域の人、先生と子どもたち、地域の大人と子どもたち、子どもたち同士のコミュニケーションが素晴らしかったです。

文珠小学校では、「味噌づくり」や「文珠の火祭り」のような核となる活動を年間行事の中で位置付けていて、コミュニティの中で教育活動を重ねてきています。これは、本当に素晴らしい伝統です。校長先生が、地域の人や保護者の願いや思いを大切に教育活動を実施していることがよく分かりました。信頼関係が確かなものになるので、是非、エジプトに戻ってから真似したいと思いました。

また、研修を通して、プロジェクトは、ただ成功させることだけが重要なのではなく、失敗を経験して本気で学ぶこともわかりました。深い学びのためには、壁も必要です。文珠小学校では、いじめの問題の解決策の一つとして、仲間とつくり上げる清掃活動に取り組んでいました。単なる掃除ではなく、仲間との絆づくりのように思いました。うまくいかなくても、あきらめずやり遂げて、よいコミュニティをつくっていました。校長先生の学校づくりに関するリーダーシップは素晴らしいと思いました。私も、誰でもできる簡単なプロジェクトから始めようと思います。」

後日、この研修生の熱い気持ちは、文珠小学校の校長に伝えた。心からのおもてなしで学校を開き、協力していただいた福井市の公立小学校の先生方に心から感謝したい。

(教員C:特活、ディスカバリーの教員の報告)

「私は、今回の研修で省察が最も重要だと感じました。

エジプトでは、教員が指導しすぎていると思います。ファシリテーターとしての教員が見当たりません。私は、教科や特活等の全ての授業の中で取り組んでいこうと思います。授業研究の中で仲間と省察することも大切で、ファシリテーターとしての力量を全ての教員が身に付けなくてははいけません。日本の教育の質の高さは、この仲間たちとの省察力であると感じました。新しいアイデアは、自分の頭の中にあるのではなく、仲間とのディスカッションの中から生じて始まるものなのです。

私は、エジプトに戻ったら、コミュニケーション力を高め合いながら、みんなを幸せにして、元気にするプロジェクトを始めようと思います。特に大切にしたいキーワードは、次の通りです

- ・健康
- ・人間関係、コミュニケーション
- ・コミュニティ
- ・実践記録

日新小学校を訪問した時、子どもたちは自主的に放送を使って、仲間たちにインフルエンザ予防策を伝えていました。高学年の子どもには、大人のような思慮深さや配慮が感じられました。いろいろな活動を通してリーダーをつくらせているのだと思いました。低学年、中学年、高学年と実践と省察を積み重ねていく中で、子どもたちは確実に成長していくのだということを学びました。このように長期ビジョンをもって教育をリードする日新小学校の校長先生の人づくりは、とても素晴らしいと思いました。」

教員が、省察的な実践者として学び続けることは、教師の成長において極めて重要なことである。その本質を的確に表現しており、エジプトの研修生の学びの確かさを再認識した。

(教員D: 博士号を持つアラビア語、特活教員の報告)

「私が今回の研修で特に大切だと思ったことは、次の3点です。」

- ・省察が大事
- ・記録が大事
- ・授業研究が大事

これらのことは、子どもたちにとっても教師にとっても大切なことです。素晴らしいアイデアは、協働の中で生まれます。教師力を高めるためには、仲間たちと協働で学び合うことが大切です。そのために実

践記録は必要なものとなります。記録があるからこそ協働の学び合いが質的に高まっていくのです。実践の省察を記録していく文化がエジプトにはないので取り入れたいと思います。

教科の授業でも特活の授業でも、授業研究がとても大切で、学年の教員や全校の教員で柔軟に行う必要があります。教科と特活は車の両輪のようなもので、両方のハーモニーが特に重要です。短期のアプローチ、長期のアプローチを考えていく必要があります。私は、エジプトに日本のような授業研究の文化を広めていきたいと思うので、サポートをお願いします。

子どもたちには、プロジェクト学習を経験させたいと思います。テーマは、教師が与えるのではなく、みんなで考えて作るのです。実践と省察をセットして授業改善に取り組んでいきます。『外国の人へのピラミッドの紹介について、遺跡のごみの問題と関連付けて考える』というようなプロジェクト学習も面白いと思います。そのような学びの履歴をポスターで表し、学級会で保護者等に報告するのもいいと思いました。エジプトに戻ったら挑戦したいです。

私は、『コミュニティ・オブ・プラクティス』や附属の先生方の学び合いから大きな刺激を受けました。自分自身がコーディネーター役となって、保護者も巻き込んだ実践的なコミュニティをつくらうと思います。」

このようなコメントは、座学の研修だけでは到底、得られなかっただろう。大変苦労はしたが、福井大学の実践と省察に基づくカンファレンス方式の研修の意義を再認識した。

(教員E: スペシャルニーズ、特活教員の報告)

「私は、特別支援の教員です。子どもたちは、それぞれに障害を抱えて他とコミュニケーションがうまく取れずに悩んでいます。私は、日本に来る前に悩んでいました。スペシャルニーズの専門的な知識は必要だけれども、特活をやることに何の意味があるのかよく分らなかったからです。EJSが、突然、特活を重視すると言っても、教師である私自身が、よくそのこの意味を理解できませんでした。

それが日本に来て、いろいろなことを見て、ディスカッションしてはつきりとわかるようになりました。特別活動を仲間と実践していく中で、スペシャルニ

ーズの子どもたちも通常の子どもたちもともに多くのことを経験し、学び合い、少しずつ自信をつけているのです。このことは、自尊感情であるセルフエスティームを高めます。縦割りによる先輩と後輩の学び合いの継続は、とてもよくできたシステムで、子どもたちは協働の学び合いで自信をつけていきます。特別支援の子にも通常の子どもにも双方に学びがあり、成長があります。

私は、そのことを実践の記録としてまとめることがとても重要だと思いました。私は、これまで日々の実践で発見したことを記録してきませんでした。いろいろな記録があると思います。その記録の在り様についても今後、仲間と研究していきたいと思えます。松木先生は、『障害はその子どもたちの内にあるのではなく、その子どもと周りの者との関係性の中にある。』とおっしゃられていました。この子ども同士の間にある壁を特活によって崩していきたいと思えます。」

以上、5人の報告を聴いて、私は大変感動しました。研修を企画し、柔軟に変更しながら実践してきたことが、高く評価されたと思えました。決して規格通りの楽な道ではありませんでしたが、困難な課題にぶつかりながらも、仲間と共に知恵を出し合い、粘り強く創り上げてきたことに間違いはなかったという満足感に包まれました。

15. 研修のまとめのレポートの表紙作り

クロスセッションが解かれて、研修生たちは、ホームの班に戻り、自分たちの学びを一つのポスターとして描き始めた。私が担当した班では、それぞれが別々の表紙を書くのではなくて、この研修全体を振り返って共通の表紙を皆で協力して描き上げることになった。

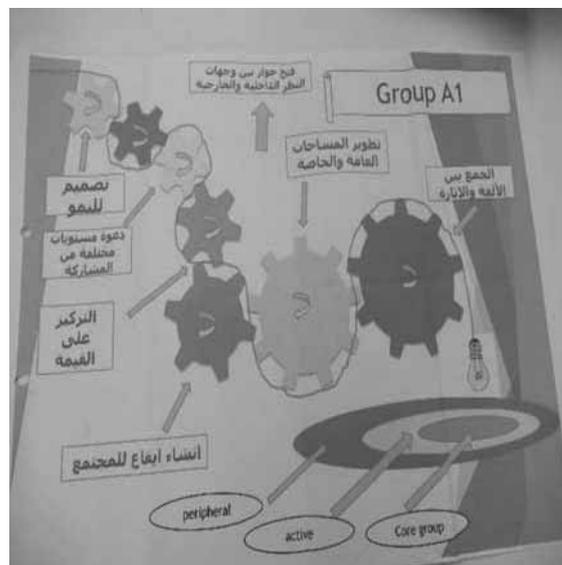
表紙には、7つの歯車が描かれた。意味としては、「コミュニティ・オブ・プラクティス」で書かれている「コミュニティの発展のための7つの原則」をイメージしたものであった。7つの歯車が連動して、ランプが灯るということのアピールしていた。

これまで何回も感じていることだが、エジプトの人たちの芸術的な表現力は素晴らしいものがある。アイデアを出し合い、白板にそのイメージがどんどん書き込まれていった。とても斬新なデザインで、実践コミュニティの本質を実にうまくとらえていた。

メンバーは、この表紙が完成した時に笑顔で拍手をし、記念撮影をしていた。そして、自信満々でクロスセッショ

ンの場に臨んでいった。そして、その後の研修の学びも加味されて、表紙のデザインは、より美しく魅力的なものへと変化していった。

<報告書の表紙のデザイン>



16. 帰国後にエジプトからメールが届く

後日、エジプトの研修生からメールが届いた。新型コロナの感染に苦しむエジプトにおいても学校は閉鎖されているが、EJS おいては特活を中心に年間ベースの教育活動の見直しや改革が意欲的に進められている。この困難な状況の中でも、たくましく動き出しているエジプトのEJSの取り組みに励まされた。メール文を以下に紹介する。

Good evening Fuchimoto sensei,

I hope that you are well, I know that now in the morning in Japan, I know that there are currently cases that appeared in Fukui, I hope that you are fine and take preventive and safety measures.

I missed Japan very much and I missed the reflective sessions that were taking place during the training and I hope we have left a good impression on you.

I was hoping that the first message would be to talk about good things and exchange knowledge in a rich way, but I know that a strong Japan will overcome this ordeal.

Your student
Nehal Ade



Dear Professor. Fuchimoto,

Thank you for your answer full of interest and appreciation. I wish Japan and Fukui to overcome this ordeal.

We are now in Egypt taking precautionary measures to combat the virus COVID-19, schools have been closed temporarily and the trend for online learning in Egyptian Japanese schools

Also in other schools and at all stages based on the decision of the Minister of Education in Egypt, but in the Egyptian-Japanese schools more and more in a very organized and interactive way

As for the development, progress, and impact of training on schools, I will personally speak about my school (the Egyptian-Japanese School, Tami Al-Amdeed branch). I had already started and implemented the action plan (the gallery) through the activities of the Tokkatsu and reflexive sessions for students and merging them with the school curricula.

I had started on the first of March, which is the first working day after returning from Japan to implement the plan, but indirectly and it was only limited to second-grade students as a kind of experimentation.

And make sure of the success of this plan and what are the strengths, weaknesses and important notes in order to present the plan to the school administration for circulation based on actual results from the ground and what is appropriate for the conditions surrounding the school and the ability of students, school's teacher staff and management to accept it and what problems can I face during implementation, I continued to work for a period Two weeks and then the schools were closed,

The truth is that the curriculum has helped me greatly on how to implement it, because the curriculum is based on activities in a large way and infer information through activities and scientific research.

But the results were reaping the fruits of fixed steps and very effectively, so that the students of their own accord suggested creating a corner for any products or poster they do. And we had already started making 2 products and a poster on International Women's Day

It is really unfortunate that I am unable to complete the plan, but I will make adjustments to the plan that I have drawn up and presented to the school administration in a way that is

appropriate for work in the school

And I hope that the school administration will agree to it, I will put all the possibilities that can happen, as well as what are the alternative plans in the event of a problem based on what was observed on the children during the two weeks, I know well that it is not enough time to present any actual evidence or proof on the ground , But I will present it as concrete evidence and a starting point on which to base the plan

The beginning of the new school year naturally will be in September, and I hope from my heart to approve the plan, implement it and inform you of all tangible results that will happen in the future, and develop the plan in a deeper and greater way.

What I hope most is the issuance of a special code for professional blogging during the course of the plan and the activities that happen based on the activities of all teachers who implement the plan.

Greetings to all of Fukui University faculty, and to you in particular and I hope you are well and in good health and take all necessary precautions

Your loyal student
Nehal Adel

Ⅲ. 残された課題

1. エジプトの EJS における授業研究の継続的な支援

研修を修了したエジプト教員は、自信に満ちた顔で修了式に臨んだ。国の未来を占うときに、子どもたちの教育事情は重要である。質の高い教育を子どもたちに与えようと思えば、当然、質の高い教員の育成が必要となる。そういう意味で、エジプト政府が日本型の小学校を建設するというプロジェクトは、大変優れている。

それらの EJS の数多くの管理職や教員が、福井大学で学び、自国に帰国してからも意欲的に活動をしている。このプロジェクトは、まだ始まったばかりである。数多くの課題を抱えている。今後実践と省察を繰り返していく中で、エジプトにおける教師教育が進展していくことを期待したいが、福井大学としてもフォローアップ研修に努

めなければならない。

エジプトとの契約の中で、フォローアップ研修を明記している。どのようなフォローアップが必要かといえは、多岐にわたるが、まずもって力を入れるべきは授業研究の支援である。エジプトの EJS は、まだまだ同僚性が脆弱である。管理職の意識改革が何より必要で、学校の教員全員で推進する協働的な授業研究の機運を高める必要がある。

今回、エジプトの教員は、福井の教師教育や授業研究の一端を見学した。エジプトに戻って授業研究に挑戦していると思うものの、日本からの継続的な支援が必要である。主体的で対話的で深い学びにつながるような授業研究を学校の文化にしなければならない。管理職やミドルリーダーのファシリテーターとしての役割も重要になる。

また、専門職である教師の成長のためには、授業研究の省察を実践記録にまとめることが必要不可欠となる。実践記録を書いて、仲間と読み合い、聴き合うような学校文化を形成するためにも、エジプトの教員研修の支援を続けることができると思う。

2. エジプトの教員研修センターの開設支援

エジプトの学校で実際に授業を参観し、授業研究会で話題提供するような支援は、重要である。日本とエジプトの地理的な距離の問題を考えた時、やはり、エジプト国内に拠点となるセンターの開設が必要になる。福井大学の分室のような働きをするセンターを開設しておけば、EJS の支援を現地で継続的に行うことができるからだ。

エジプトの教育省やトレーナーがいろいろ学校を指導しているようだが、エジプトの教員は、福井大学で経験した質の高い先進的な研修との差、ギャップに悩んでいる。エジプトの教育省とも協働して、そのような声に応えていくためには、現地での活動の拠点となるセンターの開設が求められる。

また、エジプトの大使館から、「現地の EJS の学校の校長を日本の教員に任せたい。」という依頼があるようだ。そのようなことが実現していけば、複数の学校間で授業研究に関する学びのネットワークがつけられるだろう。福井での研修を修了したエジプトの教員が、実践コミュニティをつくることに対して、今後も支援を続けていく必要がある。そのキーワードは、「協働的な授業研究で同僚性を構築すること」である。一つの学校単位だけでなく、エリア単位で互恵的で協働的な学び合いの文化をつくり

あげたい。

3. コロナ禍におけるオンライン方式の学習の挑戦

令和2年度は、新型コロナウイルスが猛威を振るい、これまでの大学の取り組みができなくなった。エジプト研修も計画通り実行できなくなってしまった。

本学の連合教職大学院は、このような難局の中でも Zoom を活用してオンライン方式の協働的な学びを展開している。カンファレンスもラウンド・テーブルも Zoom を活用して実施し、大きな手ごたえと成果を挙げている。

このような新たなチャレンジの成果についても、いつの日かエジプトの皆さんに報告できればと思っている。

「ピンチはチャンス」と捉えなおし、私自身がエージェンシーとレジリエンスを意識して、未来社会に向けて責任ある学びを続けていきたい。

今後は、以下のような大きな課題についても、Zoom を活用してエジプトの EJS や教育省に伝えることができればと考えている。

- ・新型コロナウイルスの中で、いかに学校を再開し、働き方改革を進め、世代間の学び合いを進めて教師力を向上させていったか。
- ・旧態然とした学校文化を未来型の探究型へと改革していくために、組織マネジメントやカリキュラム・マネジメントをどのように展開していったか。
- ・コミュニケーション力やエージェンシー、レジリエンスという、これから求められる資質能力をどのような教育活動で身に付けていったか。
- ・働き方改革、人材育成、質の高い教育の推進という重要な課題を解決するためのマネジメントの工夫をどのように展開していったか。

おわりに

これからの教師には、Society5.0 のより困難な時代を生き抜く力が求められている。教師は、その時代を生きぬく子どもたちを育成していかねばならない。そのためには、自律的に学び続けていくことや仲間との協働研究が必要不可欠となる。

本大学院が、これまで一貫して大切にしてきたことは、「プロフェッショナル・ラーニング・コミュニティ」の構築である。この実現のために、学校の先生方と共に協働研究していくことを大切にしてきた。その取り組みは、短期で完成するものばかりではなく、実践と省察のサイクル

を長期にわたって積み重ねていくものであった。実践的な取り組みが、長期のサイクルで展開、推進されることが重要である。

また、実践的なコミュニティには、コアのメンバーが必要となる。とりわけ管理職の在り様は、大きなキーポイントとなる。管理職にファシリテーターとして資質能力があるのかないのか、マネジメントの資質能力があるのかないのかで組織力は大きく変わってしまう。学校改革マネジメントコースの開設によって、現職の管理職も協働研究に巻き込むことが可能となった。未来の管理職である中堅リーダーの育成も確実に進展してきている。このような取り組みは、福井県の教員育成指標の具現化とも合致するものであり、教師一人一人の教育実践の記録が生涯にわたって継続的に省察できることは、文部科学省からも大いに評価されている。

福井大学教職大学院のこれまでの取り組みの成果は、県内だけでなく、県外、国外にも発信されている。近年、エジプトだけでなく、マラウイ等のアフリカ諸国、タイ、シンガポール、フィリピン等のアジア諸国とも教師教育の協働研究が進展してきている。

こうした取り組みで、私は、自分のこれまでの実践をより深く省察し直すことができるようになった。文化や価値観の異なる他者との交流は刺激的で、このことで私自身のコミュニケーション力は鍛えられることになった。自分がこれまで積み上げてきた教育実践を改めて他者に伝えることで、より深く省察することができるようになった。同質的な者たちとの学び合いでは、見逃してしまうような実践の意味付けや価値づけについても、異質なものととの学び合いのおかげで、より明確なものとなった。

「何が教師教育において有効なのか。」

「実践コミュニティが同僚性を高める。」

というようなことを深く掘り下げることができるようになり、結果として、グローバル時代に必要不可欠なコミュニケーション力やクリティカルシンキング、レジリエンス、エージェンシー等を鍛えるとともに視野が大きく広がった。これらのことは、今回のエジプト研修で私自身が獲得した大きな成果である。

コロナ禍という厳しい条件の中で本研修は続いていく。エジプトの教員研修のお手伝いということだけでなく、本研修を通して、附属や本学の教職大学院の目指す教育のデザインをより鮮明なものにしていきたい。

[参考文献]

アンドレアス・シュライヒャー経済協力開発機構 OECD)

教育スキル局長,「教育とスキルの未来:Education 2030」,
文部科学省初等中等教育局教育課程課教育課程企画室訳
マイケル・フラン, 塩崎勉訳,「The Principal」
―校長のリーダーシップとは―, 東洋館出版社
ドナルド・A・ショーン, 柳澤昌一, 三輪健二監訳
「省察的实践とは何か」
―プロフェッショナルの行為と思考―, 鳳書房
エティエンヌ・ウエンガー, リチャード・マクダーモット,
ウィリアム・M・スナイダー, 野村恭彦監訳,
野中郁次郎解説, 桜井祐子訳,「コミュニティ・オブ・プ
ラクティス」
―ナレッジ社会の新たな知識形態の実践―, 翔泳社
福井大学教育学研究科教職開発専攻(教職大学院)
淵本幸嗣『教師教育研究』vol.12
渡邊本爾『教師教育研究』vol.7
文部科学省:小学校学習指導要領「総則」「特別活動」
文部科学省:小学校学習指導要領「総則」解説、
「特別活動」解説、「総合的な学習の時間」解説
ピーター・M・センゲ, 枝広淳子, 小田理一郎, 中小路佳
代子訳,「学習する組織」
―システム思考で未来を創造する―, 英治出版
ピーター・M・センゲ, 守部信之翻訳,「最強組織の法則」
―新時代のチームワークとは何か―, 徳間書店
ロバート・キーガン, リサ・ラスコウ, レイヒー, 池村千
秋訳,「なぜ人と組織は変わらないのか」
―ハーバード流自己変革理論と実践―, 英治出版
E.H.シャイン, 稲葉元吉, 尾川丈一訳,「プロセス・コン
サルテーション」,
―援助関係を築くこと―, 白桃書房
トニー・ワグナー, 陳玉玲訳,「未来の学校」
―テスト教育は限界か―, 玉川大学出版部
ハーバード・ビジネス・レビュー編集部・編訳,「組織能
力の経営論」
―学び続ける企業のベスト・プラクティス―, ダイヤモン
ド社